



町民の誇りが づくりあげた街並み

山形県金山町を訪ねて〜スマート・テロワール協会会長 松尾雅彦

(まとめ・平井ゆか)

上台峠からの展望

金山の街に立てば、だれもが一瞬にして昭和初期の時代に引き戻されたような感覚に陥るだろう。道路に沿って日本家屋が軒を連ね、石積み農業用水路が巡る街並みは、厳かさとも包みこまれるような懐かしさをあわせもっている。

この日本家屋は金山住宅と呼ばれる。また、雪国ならではの高床の造りも見られる。外壁に使われている杉の木は、樹齢80年以上の「金山杉」である。「金山杉」の深い茶色と漆喰の白色が、モノトーンで統一された落ち着いた雰囲気をももしている。

金山町は山形県最上地方の山間にある。現在、人口約6200人、1800世帯という小さな町だが歴史は古い。本能寺の変の前年、1581年には文献に登場し、16世紀の終わりごろには金山城が建立された。その後、奥州街道の裏街道に位置することから参勤交代などの宿場町として栄えてきたという。

JR山形新幹線の終点、新庄駅から車で20分ほど走ると、金山町を一望できる上台峠にさしかかる。春が近いこの日、まだ雪が残る青白い山々を背に、薬師山、中の森、熊鷹森の三峰がそびえている。手前には金山川を挟み水田が広がり、この水田と三峰の間に背丈の低い金山の街

並みが溶け込んでいる。この景色が、金山町で古来続く人と自然との営みを象徴するかのようだ。

金山町の人々は杉の山と共に暮らしてきた。この地で30年以上、金山大工として杉の木の家づくりを続けてきた8代目棟梁、渡部俊治氏(66)もそのうちの一人だ。

「山で働く人が杉を育て、杉の木がきれいな水をつくる。山から流れ出るその水で、農家はコメをつくる。大工は杉の木で家をつくり、いただいたお金を街でつかう。林業、農業、工業、商業、みんな山の恵みで生きています」

30年以上ひびく

「街並みびびり100年運動」

金山町で育てられた樹齢80年以上の木材は「金山杉」と呼ばれる銘木だ。

この金山杉は金山大工たちの手によって芸術的な民家の建築材として活かされてきた。金山杉と金山住宅の伝統は、もはや「文化」と呼ぶにふさわしいと金山の人々は胸を張る。

しかし、その伝統が途切れてしまう危機が訪れた。高度経済成長が始まった60年代、金山町にも近代的な西洋建築の流れが押し寄せた。そのころ金山大工の父の元を離れ、関



金山住宅が軒を連ねる街並み。屋根は「切り妻」、外壁は漆喰の「白壁」と杉の「下見板張り」がその特徴だ。



民家カフェ「お休み処 一福や」の店内。金山杉の趣の異なる部位をそれぞれ天井や壁、床、家具、調度品に活用した味わいのある空間。

東で宮大工の修行を積んでいた棟梁の渡部氏は、故郷の金山町が変わっていった当時を振り返る。「我々は杉の木の恵みで生きてきたのに」

木の家の良さを知り、木の家をつくるために技術を磨いていた渡部氏は、その光景に驚き悔しい思いが溢れたという。金山町は、金山杉と金山住宅の伝統を守り、街の美しさと林業と建築の技術を継承するために立ち上がった。

こうしてはじまったのが「街並みづくり100年運動」である。いまから30年以上前の83年のことである。「金山杉」は80年以上かけて育て、伐採しては植えていく。

「100年」には、「金山杉」が育つまでの長い年月とともに運動を長く続けていくという意味が込められている。

運動は30年以上たったいまも続いている。運動のもと、これまでに新築された金山住宅は450軒以上にのぼる。民家のほか、住民が文化活動を行なう「蔵史館」、交流施設の「マルコの蔵」、「大堰（おおぜき）公園」の休憩所などの公共施設の



石積みの農業用水路「大堰」と「杉皮葺き屋根」の家
金山杉は樹齢を重ねると皮がきめ細かく網状になり、「杉皮葺き」屋根の材料になる。雨が漏らないように何層も重ねている。金山町のなかでも杉皮葺きの屋根は少ないが、「大堰」の近くで見ることができた。

ほか、信用金庫や飲食店にも金山住宅の造りが取り入れられ、街並みに溶け込んでいる。金山町の人々にとって、金山住宅は個人の家であると同時に、町の人々や金山町を訪れる旅行者の眼に触れる公共の建物だという考え方があるのだという。

金山住宅を建てようという人には、町から補助金が給付される。しかしそれは、建築費の5%にも満たない。短期間に組み立てられる近代住宅のほうはずっと安い買い物である。それでも、住民が金山住宅を建てる理由を金山町産業課商工景観推進員の丹洋一氏は、自信をもって言う放つ。



藩政時代から植林が行われてきた金山杉の林。

「この人たちの誇りでしよう」

林業家と大工の誇りが支える 金山杉と金山住宅

住民が金山住宅に対する誇りは、林業家の金山杉に対する誇りと同じだ。杉の木はふつう、樹齢40〜50年で伐採されて建築材になる。一方、金山杉は、樹齢80年以上のものだけが「金山杉」の建築材として認められる。暖かい地域で育った杉の木で建てた家は、この地の豪雪に耐えられず変形することもある。しかし、この地の厳しい冬の寒さと風雪に耐えて生長した金山杉は、年輪と年輪



星川隆弘（ほしかわ・たかひろ）

1947年生まれ。1969年に三英興業に入社。現在、(有)三英クラフト代表取締役、三英興業株取締役。
三英興業：1950年設立。現在、金山町をはじめ最上地方で約2100haで育林している。金山町の民間の林業会社のシェア4割を占める。
三英クラフト：2002年設立。森林管理を行なっている。
両社合わせて年間約10haの杉を伐採。県内外の製材所に販売。



渡部俊治（わたなべ・しゅんじ）

1949年生まれ。渡辺建築の8代目棟梁。関東で宮大工の修行を積み、40歳ごろ、父から棟梁を引き継ぐ。

の間が狭く引き締まり、頑丈な木材になる。雨が多い金山町の風土も杉づくりに適している。金山町で育林に携わってから46年になる林業家、星川隆弘氏は、金山杉の苗木から成木までの生長過程を知る人物だ。

「じつは、金山杉は樹齢40年ごろまでは生長度合いが悪く、幹も谷側にふくらんだように曲がってしまっています。金山杉ほど見た目が悪い杉はないと思ってしまいます。ところが60年たつと、曲がっていた幹がまっすぐになるのです」

80年という年月は、金山杉が建築材になるのに必要な時間なのだ。

金山杉には、時間だけではなく林業家たちの手間もかけられている。幼木のうちは下草刈りをし、その後、除伐（間引き）、選り分けのための間伐、下枝をはらう枝打ちなどを行なう。

「根が混み合っていると保水できず、水が走り、土砂崩れにつながります。除伐や間伐をして丈夫な根をつくれれば保水の力が増し、山とふもとを守ります。」

自分が植えた苗木が80年後、金山住宅になるまで見届けることができ、林業家はまずいなさう。それでも金山杉育てつづける理由を尋ね

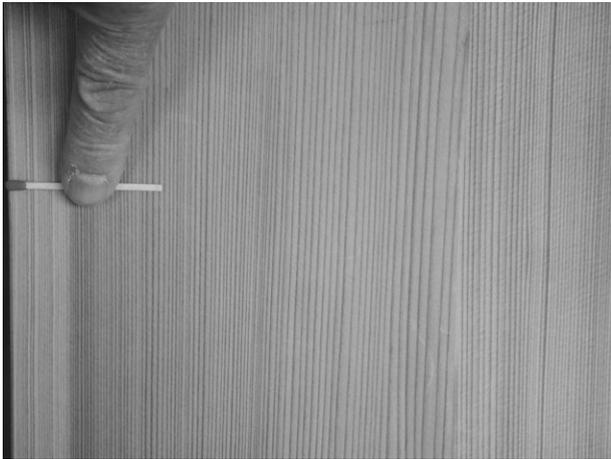
ると星川氏はこう話した。

「それは、プライドですね」

金山大工の棟梁、渡部氏は金山杉をこう評する。

「金山杉は年輪の目が詰まっ（丈夫です。それに、辺材の『白太（しろた）』と芯材の『赤太（あかた）』がきれいです。壁にこういった木材を使うと、見る人の気持ちが癒されますよね。節がある材木は丈夫なので、梁などに使います」

大工の仕事は、木材を適材適所に使うことだという。床の間や座敷には節のない白太や赤太を、梁（はり）には節のある丈夫な木材を使う。



金山杉の年輪は、紙を重ねたように細かである。(左上はマッチ棒)

「最初の計画から30年たてばどんなことでも課題は出てきます。計画を見直し柔軟に変える努力をしていくことが大切なのです。ハウスメーカーに負けなように継続的に改善していくこと

も今後の金山住宅に求められるでしょう」
また、他の農村同様に人口は減少している。金山町には鉄道の駅がなく、交通手段は車かバスということもあり、街には観光客を迎えるだけのものが揃っている一方で、まだまだ観光客は少ないという。
松尾氏は、人口減少を止めるにはまず、金山町を含む最上地方全体で30年後を見据えてスマート・テロワール（自給圏）をつくり、雇用を生むことが大切だと話す。
「30年後、町に人がいなくなったらこれまでの30年間で無駄になってしまっています。想像力を働かせ、さらに30年後の未来を考えましょう。
女性の雇用機会をつくるために、農畜産物の加工場を設けるのも良いでしょう。また、金山町の木造建築用材の製材所から出る残渣を活かせば、最近、話題となっているようなバイオマス発電に取り組むことができます。U・イターナーの雇用を生む事業が展開されてこそ、金山町の街並みの美しさが真に評価されることにつながるでしょう」
また、最上地方には、住民が必要なコメの消費量の5倍にのぼる水田があるが、その



ホテルシェーネスハイム金山
創業1998年。金山町51%、JR東日本49%出資。温泉とスキー場、ゆったりできる広い客室が自慢。「美しい我が家」をコンセプトに、温かみのある空間で旅人を迎え入れている。

金山大工の仕事は、建てて終わるわけではない。少しずつ補修しながら何十年もその家と付き合うのだ。たとえば壁の一部が傷んだら、その傷んだ板だけ外して交換する。建て主とも長い付き合いとなる。
そこにはやはり大工の誇りがうかがえる。

「木は、二度生きます。第一の人生は、植林されてから自力で生長できるまで、林業の方々に手厚く保護されながら生きる人生です。その間、山の水をきれいにしてくれます。第二の人生は、伐採されて、我々に身請けされてからです。100年近く山で過ごした第一の人生のあと、も

金山町のこれからの30年を考える

金山町「街並みづくり100年運動」は、この30年で一定の成果を得たといえる。住宅、公園、施設、飲食店が美しい街並みをつくりあげ、98年には、木材をふんだんに使った滞在型リゾートホテル「ホテルシェーネスハイム金山」もオープンし、観光客の受け入れ体制も整った。
しかし、運動のスタートから30年、課題も見えてきた。金山住宅よ

りも安く早く建築でき、雪への耐性のあるハウスメーカーの家を建てたいと思う人もいる。金山杉の育成も「やまがた緑環境税」に頼るところも大きい。
全国の農村を巡り、また、企業経営も経験してきた松尾氏は、金山住宅のこれからについてこう語った。
「最初の計画から30年たてばどんなことでも課題は出てきます。計画を見直し柔軟に変える努力をしていくことが大切なのです。ハウスメーカーに負けなように継続的に改善していくこと

一部を地域に必要な農畜産物に切り替え、その農畜産物を使ったおいしい食事を提供することによって、観光地として魅力をアップさせることもできる。
長年、100年運動に携わってきた商工景観推進員の丹氏は、現状にとどまることなく、これからの金山町が取り組むべきことは何か、考えつづけている。
「30年たったから、あと70年で終わり、というのではなく、街づくりは永遠に続ける活動だと思います。課題を解決しながら100年運動を頑固に続け、オンリーワンの街を目指していきたいと思っています」